

「平和のバトン」伝えて コザ小「慰霊の日」紙面で授業

沖縄戦体験者への取材経験を語りながら「体験をつないでいくことで、平和のバトンをリレーしていくことができる」と呼び掛けた志良堂仁記者。4日、沖縄市立コザ小学校



本紙記者講師に

と戦争を起さしたくないから。皆さんも『平和のバトン』を受け取って子や孫に伝えてほしい」と願いを

沖縄市立コザ小学校(平田光秀校長)で4日、慰霊の日の新聞を使った授業が開かれ、6年生2クラス61人が戦争と平和について考えを深めた。本紙「ニュース編成センター副センター長・志良堂仁記者が戦争体験者への取材経験を紹介しながら「体験者が苦しい記憶を話してくれるのは、二度

おでかけ
りゅう
PON!

込めた。

志良堂記者は、戦争を体験していない世代でも「話を聞いたり現場を訪れたりなどの追体験をすることで、五感で戦争を感じ、心の底から戦争は嫌だと感じることができると語り、6月17日付りゅうPON!

の企画で、中学生と共に糸満市にある轟の壕を訪れた理由を説明した。「命も人生も奪うのが戦争。新聞を通して戦争の愚かさを伝えたい」と記者の思いも伝えた。

志良堂記者は、戦争を生き抜いた人々が今の沖縄を築いてきたことを説明し、「おじいさんやおばあさんが生き延びてくれたから私たちがいる。戦争は昔のことじゃなく、自分ともつながっている」と語り「『ありがと』と伝え、命のりレーとともに戦争の時の話を聞いてほしい。戦争を知ることが平和な世の中をつくる一歩になる」と語った。

授業は古波津聡教諭が担当し、道徳の時間に各学級で開かれた。2組の名嘉真亜斗霧君は「おばあちゃんとおじいちゃんがいなければお母さんも僕もいないと

聞き、ひやひやした。2人に感謝したい」と話した。1組の比屋根綺莉さんは「先のことを考えたら戦争はできないと思う。世界中で戦争がない世の中にした」と話した。